

九州バスケットボール審判殴打事件に見る 「留学生ホームシック」の再発防止について

◆事件とその処分の概要

6月17日、バスケットボールの全九州高校体育大会の準決勝の試合で、その事件が起こった。延岡学園高校と福岡大付属大濠高校との間で行われた試合で、コンゴ民主共和国から来日した15歳の留学生は、第4クォーターにファウルを取られた後、その判定に不満であったためか、審判員に近づき右手で殴打したのである。審判員は口内を10針縫う大けがを負い、試合の途中であったがそのまま救急車で搬送された。試合は没収試合となり、延岡学園は敗退したのである。

この模様は、すぐにインターネット上において公開されてSNSで話題になった。翌18日にはテレビで報道され、ワイドショーでも取り上げられるなど、さまざまな批評を加えられることになったのである。

これだけの事件になったので、学校側の対応も早かった。もちろんマスコミなどに取り上げられなくても、「スポーツマンシップ」を大事にする日本の高等学校の試合中に、それも選手同士の過熱したプレイによる接触ではなく、そのジャッジを行う審判に対する暴力事件であるから、学校もまた競技団体も重大視したに違いない。しかも、マスコミで全国的に広まってしまった以上、その処理を早く終わらせなければならないということになる。この心理状態は、高校野球の選手が飲酒や喫煙をした時などにも同様の処理が行われるのである。

延岡学園高校は、6月23日に処分を次のように発表した。

- ・寮で謹慎している留学生の留学を取りやめて6月中に帰国させる
- ・男子バスケ部は8月の全国高校総体（インターハイ）出場を辞退し、6月23日から3カ月間は対外試合を自粛する
- ・指導責任者として川添裕司監督(50)を25日付で解任し、教諭としても無期限の停職処分とする
- ・管理責任者として佐々木雅彦理事長(71)と佐藤則夫校長(65)、佐々木博之教頭(50)の給与を7月分から3カ月間、減給する。

この処分を決めたのは、学校なりに内部を調査した結果に基づくものとされている。まずは延岡学園高校において、この留学生本人とのコミュニケーションが決定的に不足していたという。15歳で来日したコンゴ民主共和国の留学生は、急に日本に来ることが決まったらし

く、日本語をあまり話すことができなかった。その上、コンゴ民主共和国の公用語であるフランス語を話すことのできるスタッフや職員が延岡学園高校にはいなかったことから、この留学生に、日本の文化や道徳、教育などの指導が不十分であった。当然に、試合の中における考え方や審判に対する態度、日本人の多くが共有するスポーツマンシップの考え方などの指導ができていなかったという。その上、監督は試合中に本人の精神的な異変を細かい態度などから察知して、その対処を速やかに行うことができなかった。つまり、試合ばかりを気にしていたということになる。このことから、監督は解任され、教諭としても指導不十分という判断が下され、厳しい処分になった。

この三つの問題が重なって事件につながり、そしてその責任に応じて処分を決めたということになっている。

◆「環境という魔物」の犠牲者としての留学生の存在

まず前提として、このコンゴ民主共和国から来た留学生、15歳とはいえ物事の分別はつく年齢であるし、また、日本において高校に通うことができるくらいの成熟度はあるのだから、今回の暴力事件は、到底受け入れられるものではないし、非難されて当然であり、処分されても仕方がないであろう。

しかし、我々日本語学校という留学生を相手にする立場としては、このような事件を起こしてしまう背景をしっかりと考えなければならないのではないだろうか。

この留学生(あえて名前は伏せる)の暴力事件までの経緯を見た場合、ある意味で学校側、そして、日本における環境にも問題があるのではないかというような感覚がある。そもそも、この留学生は今年2月に来日している。バスケットボール部の推薦入学ということになっているが、実は彼はバスケットボールが未経験であった。2メートル4センチという背の高さと、跳躍力などを含む身体能力の高さを評価され、バスケットボールを一から教えるということで、日本に招かれたのである。しかし、コンゴ民主共和国の公用語であるフランス語を話せる人が延岡学園高校には一人もいないことから、勉強はもちろん、バスケットボールの練習や選手とのコミュニケーションも、またバスケットボールのルールでさえも、留学生は満足に学ぶことができなかった。当然に、日本人が大事にしているスポーツマンシップや、武士道的な清廉潔白さ、ルールを守ることの重要性など、スポーツや勝負に対する考え方も会得できなかったのである。

まだ高校1年生の若さで、言葉も通じないところに独り連れてこられ、その上、ルールも何も分からない競技を練習させられ、そしてなぜか、その競技で学校全体を強くすることを期待されている。もちろん、個人の性格差などもあるが、彼はたまたま内向的な性格であったのか、早くも春ごろにはホームシックにかかってしまったという。

本来であれば、ホームシックにかかってしまった「同級生」がいれば、何とかコミュニケーションをとり、仲間として一緒に何かするとか、楽しい時間を過ごすということがあ

ではないか。これがアフリカから来た外国人ではなく、日本の他の地方から来た日本人であれば、そのようにしていたのではないか。残念ながら、この学校の職員、教員、監督、そして同級生や先輩は、留学生がホームシックとコミュニケーション不足とによって精神的に不安定になってゆく状態に気が付かなかったのか、あるいは、気が付いても何もしなかったのか。結局、この事件が起きるほど悪化するまで、そのまま放置してしまったのである。

この事件の後、身長 2 メートルを超える留学生は、監督に抱きつき「ごめんなさい。ごめんなさい」と子供のように号泣していたという。何となく、その精神状態が哀れにも思えてくる。唯一救われるのは、大げがをした審判が「バスケットを嫌いにならないでほしい、続けてほしい」と言って、告訴などはしないとしたことである。この審判は、本当に不運にも事件に巻き込まれ被害を被ってしまったのであるが、その反面、この留学生の気持ちが最もよく分かったのかもしれない。

要するに、この留学生と最もコミュニケーションを取らなければならない延岡学園高校の教員や職員、監督、そして何よりもチームメイトや同級生などの「仲間」といえる人々が、留学生であるということに異質なものを感じてしまった結果、本当の仲間として受け入れることができず、本来最も気を使わなければならない部分を放置し、加害者である留学生を傷つけていたということが、この問題の本質であると言える。暴力を振るったことは当然に悪いが、その一方で留学生本人も、外国人とのコミュニケーションが取れない日本社会の犠牲者ではないだろうか。

◆留学生が来日した後の日本社会の受け入れ態勢を整えよ

それならばこの事件、留学生の帰国は必ずしも必要ないはずだ。しかし、留学生はともかくも帰国しなければならない状態になってしまった。ここに、日本社会の「もう一つの環境の悪化」という問題が出てくる。

学校によると、17 日の試合で審判を殴ったニュースがインターネットやテレビ、新聞で流れると、翌 18 日から連日、人種差別表現を含む留学生への誹謗中傷の電話やメールが深夜まで相次いだという。中にはヘイトまがいのものや、暴力行使を示唆するものまで横行し、学校や他の生徒に対する嫌がらせなども心配される事態になった。記者会見などでは、実際にそのような実行行為があったかどうかは明らかにされていないが、それでも留学生を帰国させなければならない状態にあったということではないか。延岡学園高校の佐藤則夫校長は「不測の事態もあり得るので、本人をできるだけ早く帰国させたい」とコメントしているので、かなり深刻な状態ではなかったかと想像される。

もう一つの環境の悪化とは、まさにこのことであろう。つまり、事情をあまり知らない他人が、マスコミやネットの情報だけで、「外国人差別」を行うという現実がある。日本人社会には、「自分たちと違う文化または異質な慣習を持つ人」を受け入れない傾向があり、また「異形の物」「マレビト(稀人)」に対して畏怖と同時に差別の感情を持ってしまうという特

徴がある。ある意味で、日本人的な不文律や暗黙の了解というような文化が発達しているのである。これらを自ずと察して、「空気を読む」「忖度^{そんたく}する」というようなことが美德とされてきた独自の文化があり、その感覚を持つ人と持たない人で露骨に態度が変わったりする。もともと、観光客を含めた「一見^{いちげん}さん」には、初めからそのようなことを期待しないので、同じ外国人であっても観光客には優しく接するが、留学生のように自分たちの生活範囲の中に入ってくる場合は、その許容性が一気に狭まる傾向にあるのだ。そして、何か問題が生じた時や、犯罪が起きた場合などにおいては空気を読めない人や、よそ者が真っ先に疑われ、またバッシングの対象になるというような文化的土壌があることは否めない事実であろう。

実際、今回の件においても、コンゴ民主共和国からの留学生は、日本語もバスケットボールも分からず、そして日本のこうした文化に触れることも今までなかったのであるから、彼の生活する社会環境ではある程度の差別があったことは十分に考えられる。マスコミやネットによる今回の情報の拡散は、それを一気に日本人全体に広めてしまったのではないか。

このようなことは、我々の日本語学校に通う留学生の中にも同じことが言える。日本人と同じような時間に帰ってきているのに、留学生だけがうるさいと近所から苦情を言われたり、あるいは、アルバイト先で何か事件が起きた時には、真っ先に疑われるというような、日本人社会に対していやな思いをしたことのある留学生は少なくないのではないか。

日本国政府は「留学生 30 万人計画」を推進し、また、今後は就労ビザの緩和、特に単純労働者へのビザの発給を緩和するというような方針を打ち出している。しかし、それらはあくまでも「入口」つまり、日本に入ってくる時の手続きのことであり、実際に来日してから、彼らが日本社会に対して失望を感じないよう、あるいは日本の文化を受け入れ易くするような政策を、日本の政府はあまり講じていない。さらには、日本人が外国人留学生に対して違和感を持つような目を向けたり差別的な扱いをしないということや、日本語が不自由な留学生を周辺の人々が温かく見守るようになるための「日本人に対する働きかけや啓発」などが全く行われていない。日本語学校や大学の別科においても、日本の文化をしっかりと学ばせて日本の民俗を考えさせたり、あるいは母国とそれを比較させるということが徹底できていない。「日本語という道具」を教えることは当然に行われているが、「日本語から理解できる日本人の魂」を教えることについては、政府は全く指導していないのである。

そのような留学生の受け入れ態勢ができていなければ、今回の高校生のような事件はこれから我々日本語学校の学生の中にも出てくるのが予測されるし、また「30 万人計画」などにより留学生が多くなるということは、それだけ同様の背景を持つ事件も増えるであろうということに他ならないのである。

日本語学校の皆さんが、できる限り日本文化や日本人の物の考え方を留学生に教えていただくと同時に、政府もそのようなことを指導、助言するようにして、多くの留学生に日本を好きになってもらうということが必要なのではないか。